

第1章 総則

(目的)

第1条 この規則は、国立大学法人室蘭工業大学（以下「本学」という。）における研究活動等の不正行為の防止に関し必要な事項を定め、もってその運営及び管理の適正化を図ることを目的とする。

(定義)

第2条 この規則において「公的研究費」とは、文部科学省、文部科学省が所管する独立行政法人又はその他の機関等から配分される競争的資金を中心とした公募型の研究資金、運営費交付金、寄附金、補助金及び委託費等を財源として本学が扱う全ての経費をいう。

2 この規則において「不正行為」とは、故意又は研究者としてわきまえるべき基本的な注意義務を著しく怠ったことによる、次の第1号から第3号に掲げる研究活動上の不正行為及び第4号に掲げる公的研究費の不正使用をいう。

(1) 捏造 存在しないデータ、研究結果等を作成すること。

(2) 改ざん 研究資料、研究機器及び研究過程を変更する操作を行い、データ、研究活動によって得られた結果等を真正でないものに加工すること。

(3) 盗用 他の研究者のアイデア、分析及び解析方法、データ、研究結果、論文又は用語を当該研究者の了解又は適切な表示なく流用すること。

(4) 公的研究費の不正使用 実体を伴わない謝金又は給与を支払わせること、架空の取引により代金を支払わせ業者への預け金として管理させること及び実体を伴わない旅費を支払わせること等、法令、公的研究費を配分した機関（以下「資金配分機関」という。）の規則及び本学の規則等に違反する経費の使用を故意若しくは重大な過失により行うこと。

3 この規則において「不適切行為」とは、研究の立案、計画、実施、成果の取りまとめ（外部資金等を用いた場合の支援者への申請、報告を含む。）及び公的研究費の使用における次の各号に掲げる行為をいう。

(1) 二重投稿 同一内容とみなされる研究論文を複数作成して異なる雑誌等に発表すること。ただし、投稿先学術雑誌等の規定を満たし、二重投稿と解されない状態となったものは除く。

(2) 不適切なオーサーシップ 研究論文の著者リストにおいて、著者としての資格を有しない者を挙げ、又は著者としての資格を有する者を除外すること。

(3) 公的研究費の不適切使用 公的研究費の使用に際し、法令、資金配分機関の規則及び本学の規則等に違反する経費の使用を過失により行うこと。

(4) その他 前3号に規定するもののほか、研究倫理に反する行為をすること。

4 この規則において「構成員」とは、研究者（共同研究を行う民間企業からの出向者等を含む。）、技術職員、事務職員及び資金配分機関から競争的資金の配分を受けた学生等のうち、本学の研究活動及び公的研究費に携わる全ての者をいう。

5 この規則において「不正防止のための教育」とは、コンプライアンス教育及び研究倫理教育双方の総称である。

(1) コンプライアンス教育 公的研究費の運営管理に関わる構成員に対し、自身が取り扱う公的研究

費の使用ルール及びそれに伴う責任等を理解させるために実施する教育をいう。

(2) 研究倫理教育 論文及び研究成果を発表する研究活動に携わる者に求められる倫理規範等を修得させるための教育をいう。

6 この規則において「啓発活動」とは、構成員に対し、不正を起こさせない組織風土を形成するために、不正防止に向けた意識の向上と浸透を図ることを目的として実施する諸活動全般をいう。

7 この規則において「研究データ」とは、実験の生データ、実験ノート、実験試料及び実験のために使用するプログラム等、外部に発表する論文及び研究成果（以下「研究成果」という。）を導出するために必要とした各種データ等のことをいう。

8 この規則において「部局等」とは、事務局、各領域、各学科、博士前期課程各専攻、博士後期課程専攻、国立大学法人室蘭工業大学組織規則に規定する附属図書館、保健管理センター、国際交流センター、キャリア・サポート・センター、航空宇宙機システム研究センター、ものづくり基盤センター、希土類材料研究センター、社会連携統括本部、理工学人材育成本部、研究基盤設備共用センター及び技術部をいう。

第2章 組織の責任体制

(最高管理責任者)

第3条 学長は、研究活動等の不正防止について最終責任を負う最高管理責任者として、本学全体の研究活動等の不正防止の取組を推進するものとする。

2 最高管理責任者は、不正防止対策の基本方針を策定し、周知するとともに、それらを実施するために必要な措置を講じるものとする。また、統括管理責任者及びコンプライアンス推進責任者が責任を持って研究活動等の不正防止に関する取組が行えるよう、必要な措置を講じるものとする。

3 最高管理責任者は、統括管理責任者及びコンプライアンス推進責任者から当該年度の不正防止に関する実施状況等について報告を求め、その進捗を把握するとともに、必要に応じて基本方針の見直しを図るものとする。

4 最高管理責任者は、基本方針及び具体的な不正防止対策の策定にあたっては、役員会において審議を主導するとともに、その実施状況や効果等について役員等と議論を深める。

5 最高管理責任者は、啓発活動を定期的に行い、構成員の意識の向上と浸透を図るものとする。

6 最高管理責任者は、研究費不正根絶への強い決意を掲げ、不正防止対策を実効性のあるものとするために定期的に各責任者から報告を受ける場を設けるとともに、強力なリーダーシップの下、必要に応じて基本方針の見直し、必要な予算及び人員配置などの措置を行う。

7 最高管理責任者は、再発防止の観点から、不正が発生した部局等に対する措置を講じるとともに、不正に関与していない部局等及び構成員の研究活動並びに学生の教育研究活動の遂行に影響を及ぼさないよう、必要な措置を講じるものとする。

(統括管理責任者)

第4条 最高管理責任者を補佐し、研究活動等の不正防止について本学全体を統括する実質的な責任と権限を持つ者として、統括管理責任者を置き、学長が指名する理事をもって充てる。

2 統括管理責任者は、不正防止対策の組織横断的な体制を統括し、基本方針に基づき、本学全体の具体的な対策の策定、実施及び実施状況の確認を行い、最高管理責任者に報告するものとする。

3 統括管理責任者は、不正防止計画の策定だけでなく、コンプライアンス教育及び啓発活動を通じて構成員の意識向上及び浸透を促し、組織全体で不正を防止する風土を形成するための総合的な取り組みを

実施する。

- 4 統括管理責任者は、コンプライアンス教育及び啓発活動等の具体的な計画を策定及び実施する。なお、コンプライアンス教育及び啓発活動の実施計画については、対象、時間、回数、実施時期及び内容等を具体的に示すものとする。

(コンプライアンス推進責任者)

第5条 部局等における研究活動等の不正防止について実質的な責任と権限を持つ者として、コンプライアンス推進責任者を置き、学長が指名する副学長をもって充てる。

- 2 コンプライアンス推進責任者は、統括管理責任者の指示の下、次に掲げる事項を実施するものとする。
 - (1) 部局等における対策を講じ、その実施状況を確認するとともに、統括管理責任者への報告を行う。
 - (2) 研究活動等の不正防止を図るため、研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員に対する不正防止のための教育の定期的な実施及び受講状況の管理監督を行う。
 - (3) 不正防止に向けた意識の向上と浸透を図るため、構成員に対する啓発活動を定期的実施する。
 - (4) 公的研究費の運営管理に関わる構成員が、適切に研究活動等の取組を行っているか等をモニタリングし、必要に応じて改善指導を行う。
 - (5) 統括管理責任者が策定する実施計画に基づき、公的研究費の運営管理に関わる構成員を対象としたコンプライアンス教育を実施する。
 - (6) 統括管理責任者が策定する実施計画に基づき、構成員に対して、不正根絶に向けた継続的な啓発活動を実施する。

- 3 コンプライアンス推進責任者を補佐する者として、コンプライアンス推進部局責任者を置き、部局等の長をもって充てる。

(研究不正防止委員会)

第5条の2 本学全体の観点から不正防止計画を推進し、構成員の不正行為及び不適切行為(以下「不正行為等」という。)を防止するため、研究不正防止委員会(以下「不正防止委員会」という。)を置く。

- 2 不正防止委員会は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 学長が指名する理事
- (2) 学長が指名する副学長
- (3) 領域長
- (4) その他学長が必要と認めた者

- 3 前項第4号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

- 4 不正防止委員会は、次に掲げる事項を審議する。

- (1) 不正行為等のコンプライアンスに関すること。
- (2) 不正防止計画の策定、推進、評価及び見直しに関すること。
- (3) 不正防止のための教育及び啓発活動に関すること。
- (4) その他不正行為等の防止に関すること。

- 5 不正防止委員会は、統括管理責任者ととも本学全体の具体的な対策の策定、実施及び実施状況を確認する。

- 6 不正防止委員会は、監事との連携を強化し、監事に必要な情報提供等を行うとともに、不正防止計画

の策定、実施及び見直しの状況について意見交換を行う機会を設ける。

- 7 不正防止委員会は、監査室とともに不正を発生させる要因について、本学全体の状況を体系的に整理し評価する。
- 8 不正防止委員会は、ルール全体の全体像を体系化し、公的研究費の運営管理に関わる構成員に分かりやすい形で周知する。
- 9 不正防止委員会は、公的研究費により謝金、旅費等の支給を受ける学生等の構成員に対してもルールの周知を徹底する。
- 10 不正防止委員会に委員長を置き、学長が指名する理事をもって充てる。
- 11 委員長は、不正防止委員会を招集し、その議長となる。
- 12 委員長に事故があるときは、予め委員長が指名した委員が前項の職務を代行する。
- 13 不正防止委員会は、委員の過半数の出席がなければ議事を開き、議決することができない。
- 14 委員会の議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 15 委員長が必要と認めたときは、委員以外の者を不正防止委員会に出席させ、その意見を聴くことができる。
- 16 不正防止委員会の事務は、関係各課の協力を得て、研究協力課が行う。
- 17 この規則に定めるもののほか、不正防止委員会の運営等に関し必要な事項は、不正防止委員会が定める。

第3章 適正な運営及び管理のための環境整備と研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員の責務

(環境整備の指針)

第6条 研究活動等の不正防止に関する各種規則及び体制等の整備にあたっては、業務の実態と職務権限等に乖離があるか否か、公的研究費の運営管理に関わる構成員にとってわかりやすいルールであるか否かを定期的に確認し、必要に応じて適切に見直しを行い、公的研究費の運営管理に関わる構成員に周知を図るものとする。

- 2 学内の規則及びルール等を見直す場合には、それに基づく業務が適切に運用できているか否かを確認するため、モニタリングの観点を盛り込むものとする。
- 3 研究活動等の不正防止に関する取組及び規則等について、学内外からの相談に迅速かつ適切に対応するため、相談を受け付けるための窓口を設置し、担当係等を公開するものとする。
- 4 研究活動等の不正防止に関する本学の管理運営体制、関係規則及び各種取組等については、積極的にホームページにより学内外に情報を公開するものとする。

(行動規範)

第7条 不正行為等を防止するため、行動規範を公開するものとする。

- 2 行動規範の内容は、基本方針における考え方を反映させたものとする。また、公的研究費の運営管理に関わる構成員の意識の向上と浸透のため、個々の事象への対応ではなく、本学における公的研究費の運営管理に関わる構成員としての取組の指針を明記し、コンプライアンス教育の中で周知徹底するものとする。

(不正防止計画の策定)

第7条の2 不正防止計画の策定にあたっては、最高管理責任者が策定する基本方針に基づき、本学全体の具体的な対策のうち最上位のものとして、不正防止計画を策定する。

- 2 不正防止計画の策定にあたっては、把握した不正を発生させる要因に対応する対策を反映させ、実効性のある内容にするとともに、不正発生要因に応じて随時見直しを行い、効率化及び適正化を図る。
- 3 部局等は、不正根絶のために、不正防止委員会と協力しつつ、主体的に不正防止計画を実施する。

(研究費の適正な運営管理活動)

第7条の3 部局等は、不正防止計画を踏まえ、適正な予算執行を行う。

(教育の実施)

第8条 不正行為等を防止するため、研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員に研究活動等の不正防止のための教育を受講させるものとする。

- 2 不正防止のための教育を実施するにあたっては、研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員の職種及び業務実態に則した教育が受講できるよう留意するものとする。
- 3 教育実施後には、教育内容を理解したこと等を明記した誓約書(別記様式第1号)を提出させ、保管するものとする。

(研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員の責務)

第9条 研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員は、高い倫理観を保持し、不正行為等を行ってはならない。

- 2 研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員は、不正行為等を防止するために学内規則等を遵守するとともに、コンプライアンス推進責任者の指示に従わなければならない。
- 3 研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員となった時点で本学が定める不正防止のための教育を必ず受けなければならない。また、最高管理責任者が指定する教育を定期的に受けなければならない。
- 4 研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員は、前項で定める教育を最初に受ける際に教育内容を理解したこと等を明記した誓約書(別記様式第1号)を最高管理責任者に提出しなければならない。

(懲戒処分)

第10条 最高管理責任者は、研究活動及び公的研究費の運営管理に関わる構成員が前条に挙げる事項に反した場合、国立大学法人室蘭工業大学職員就業規則第33条及び国立大学法人室蘭工業大学非常勤職員就業規則第34条の規定に基づき、懲戒処分を行うものとする。

第4章 不正行為等に係る申立て、調査及び処分

(申立て窓口の設置)

第11条 不正行為等に関する申立て又は相談(以下「申立て等」という。)を行う者(以下「申立者」という。)からの申立て等は、申立て窓口で受け付けるものとする。

- 2 申立て窓口は、研究協力課長とする。
- 3 学長が必要と認めたときは、第三者機関に申立て窓口を設置することができる。

(申立て等の取扱)

第12条 不正行為等があると思料する者は、何人も申立て窓口を通じ、申立て等を行うことができるものとする。

- 2 申立て等は、電子メール、書面、電話、ファクシミリ又は面談によるものとする。
- 3 申立て等は、原則として申立者の氏名、所属、住所等並びに不正行為等を行ったとする研究者又は研究グループ、不正行為等の態様等、事案の内容が明示され、かつ不正とする科学的な合理性のある理由

が示されているもののみを受け付けるものとする。ただし、申立者は、その後の調査において氏名の秘匿を希望することができるものとする。この場合において、当該申立者に対しての本規則に規定する通知及び報告は、申立て窓口を通じて行うものとする。

- 4 申立て窓口は、匿名による申立て等があったときは、不正行為等を行ったとする研究者又は研究グループ、不正行為等の態様等、事案の内容が明示され、かつ不正とする科学的な合理性のある理由が示されているもののみを受け付けるものとする。この場合において、当該申立者に対しての本規則に規定する通知及び報告は行わないものとする。
- 5 報道、会計検査院及び学会等の研究コミュニティ等の外部機関から不正行為等の疑いが指摘されたときは、第3項に規定する申立てを受け付けたものとして取扱うものとする。
- 6 インターネット上に本学に係る不正行為等の疑いが掲載されている（不正行為等を行ったとする研究者又は研究グループ、不正行為等の態様等、事案の内容が明示され、かつ不正とする科学的な合理性のある理由が示されている場合に限る。）ことを本学が独自に把握したときは、第3項に規定する申立てを受け付けたものとして取扱うものとする。
- 7 本学以外の機関に係る内容の申立て等があった場合には、当該機関へ回付するものとする。
- 8 申立て窓口が受け付けたか否かを申立者が知り得ない方法による申立て等がなされたときは、申立者（匿名の申立者を除く。ただし、調査結果が出る前に申立者の氏名が判明した後は顕名による申立者として取り扱う。以下同じ。）に、申立て等を受け付けたことを通知するものとする。
- 9 申立ての意思を明示しない相談については、その内容に応じ、申立てに準じてその内容を確認、精査し、相当の理由があると認めるときは、申立者に対して申立ての意思があるか否かを確認するものとする。この場合において、申立ての意思表示がなされない場合にも、最高管理責任者の判断でその事案の調査を開始することができるものとする。
- 10 不正行為等が行われようとしている、又は不正行為等を求められているという申立て等については、その内容を確認、精査し、相当の理由があると認めるときは、被申立者に警告を行うものとする。

（申立者及び被申立者の取扱）

第13条 最高管理責任者は、申立内容及び申立者の秘密を守るとともに、申立て等についての調査結果の公表まで、申立者及び被申立者の意に反して調査関係者以外に漏洩しないよう、関係者の秘密保持を徹底しなければならない。

- 2 最高管理責任者は、調査事案が漏洩した場合、申立者及び被申立者の了解を得て、調査中にかかわらず、その事案について公に説明することができるものとする。ただし、申立者及び被申立者の責により漏洩した場合は、本人の了解は不要とする。
- 3 最高管理責任者は、悪意（被申立者を陥れるため、あるいは被申立者が行う研究を妨害するためなど、専ら被申立者に何らかの損害を与えること及び被申立者が所属する機関等に不利益を与えることを目的とする意思。以下同じ。）に基づく申立てであることが判明しない限り、単に申立てしたことを理由に、申立者に対し審査終了までは、解雇、降格、減給及びその他の不利益な取扱をしてはならない。
- 4 最高管理責任者は、相当な理由なしに、単に申立て等がなされたことのみをもって、被申立者に対し審査終了までは、研究活動を部分的又は全面的に禁止してはならない。また、同様に解雇、降格、減給及びその他の不利益な取扱をしてはならない。

（申立て等の報告及び予備調査）

第14条 申立て窓口は、申立て等を受け付けた場合、速やかに最高管理責任者、統括管理責任者及び監事

へ報告し、情報共有を図るものとする。

- 2 最高管理責任者は、前項の報告に係る事案について受け付けることが妥当と判断した場合は、統括管理責任者、コンプライアンス推進責任者及びその他最高管理責任者が指名する者に予備調査を行わせるものとする。ただし、申立者及び被申立者と利害関係がある者は調査から除外しなければならない。
- 3 最高管理責任者から予備調査を行うよう指示があった場合は、当該申立て等の信憑性、内容の合理性、研究データの保存期間を超えるか否かなど調査可能性等について調査を行い、指示を受けた日から14日以内にその結果を最高管理責任者に報告するものとする。
- 4 最高管理責任者は、第1項及び前項の報告に基づき、申立て等の受付から30日以内に申立て等の内容の合理性を確認の上、調査の可否を判断するとともに、当該調査の可否を資金配分機関及び文部科学省等（以下「関係機関」という。）に報告するものとする。
- 5 最高管理責任者は、前項の規定に基づき、調査を実施することを決定したときは、調査の開始を申立者及び被申立者（当該被申立者が本学以外の機関に所属する者であった場合は、その所属機関を含む。）に通知し、調査への協力を求めるものとする。また、調査を実施しないときは、調査しない旨をその理由と併せて申立者に通知するものとする。
- 6 最高管理責任者は、調査の実施の決定から30日以内に次条の調査委員会を立ち上げ、調査の実施に着手させるものとする。

（調査委員会）

第15条 最高管理責任者は、前条第5項において調査の実施を決定したときは、最高管理責任者のもとに調査委員会を設置し、速やかに事実関係を調査させるものとする。

- 2 調査委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。ただし、委員の半数以上は本学に属さない外部有識者とする。

（1） 本学役員、教員、事務職員の中から最高管理責任者が指名する者 若干名

（2） 弁護士、公認会計士、研究経験を持つ者等、最高管理責任者が指名する学外の有識者 若干名

- 3 前項の委員は、申立者及び被申立者と直接の利害関係を有しない者でなければならない。また、前項の委員のうち、学外の有識者については、本学と直接の利害関係を有しない者でなければならない。
- 4 調査委員会に委員長を置き、第2項の委員の中から最高管理責任者が指名する者をもって充てる。
- 5 最高管理責任者は調査委員会を組織した後、被申立者を含む調査の対象者等（以下「調査対象者」という。）及び申立者に委員の氏名、所属等を含む調査委員会構成を通知するものとする。
- 6 調査対象者及び申立者は、調査委員会構成の公正性に問題があると判断したときは、調査委員会構成の通知日から7日以内であれば異議の申立てができるものとする。最高管理責任者はその内容を確認し、妥当と認めたときは、調査委員会構成を変更するとともに、その旨を調査対象者及び申立者に通知するものとする。

（守秘義務）

第16条 調査委員会の委員及び本規則に基づき不正行為等の調査に関与した者は、その職務に関し知り得た情報を他に漏らしてはならない。

（調査の実施）

第17条 調査委員会は、不正行為等について、不正行為等の事実の有無、その内容、関与した者及びその関与の程度、不正使用の相当額等を調査するものとする。また、内容により調査対象者の他の事案における不正行為等の有無について調査すべきと思料される場合は、申立て等があった事案以外の調査も行

うものとする。なお、調査にあたっては、調査対象者の弁明の聴取が行われなければならない。

- 2 調査委員会は、調査の実施に際し、調査方針、調査対象及び調査方法等について関係機関に報告し、又は協議しなければならない。
- 3 調査委員会は、調査対象者に対し関係資料の提出、事実の証明、事情聴取及びその他調査に必要な事項を求めることができるものとする。
- 4 調査委員会は、再実験等により再現性を示すことを調査対象者に求める場合、又は調査対象者自らの意思によりそれを申し出て調査委員会がその必要性を認める場合には、それに要する期間及び機会（機器、経費等を含む。）に関し、最高管理責任者により合理的に必要と判断される範囲内において、調査委員会の指導及び監督の下にこれを行うものとする。
- 5 調査委員会は、関連する部局等の長に対し、調査協力等適切な対応を指示することができるものとする。
- 6 調査委員会は、必要な範囲で、調査対象者に対し調査事案に係る公的研究費の使用停止及び研究活動の停止を命ずることができるものとする。

（調査への協力等）

第18条 調査対象者及び申立者等の関係者は、調査委員会による事実の究明に協力するものとし、虚偽の申告をしてはならない。退職後においても同様とし、本学の要請に対し誠実に対応しなければならない。

（証拠の保全）

第19条 最高管理責任者は調査にあたって、申立て等があった事案に係る研究活動に関して、証拠となるような資料等を保全する措置をとるものとする。この場合において、これらの措置に影響しない範囲内であれば、調査対象者の研究活動を制限しないものとする。

（悪意に基づく申立て）

第20条 調査委員会が、調査の過程において当該申立てが悪意に基づくものであったと判断した場合は、直ちに調査を中止し、当該申立てを悪意に基づくものと認定のうえ、最高管理責任者に報告するものとする。なお、この認定を行うにあたっては、当該申立者に弁明の機会を与えなければならない。

- 2 最高管理責任者は、前項の報告を受けた場合、申立者（当該申立者が本学以外の機関に所属する者であった場合は、その所属機関を含む。）、被申立者並びに資金配分機関がある場合はその機関に通知するものとする。
- 3 第1項及び第22条による調査の結果、悪意に基づく申立てであると認定された場合は、最高管理責任者は、必要に応じて、当該申立者の氏名の公表、懲戒処分及び刑事告発等適正な措置をとるものとする。

（認定）

第21条 調査委員会は、調査の結果に基づき、不正行為等の事実の有無、その内容、関与した者及びその関与の程度、不正使用の相当額等について、調査の開始から、研究における不正行為等にあつては150日以内、公的研究費の不正使用及び不適切使用にあつては90日以内に認定を行い、調査結果（認定を含む。以下同じ。）を最高管理責任者に報告するものとする。

- 2 最高管理責任者は、前項の報告に基づき、調査対象者（当該調査対象者が本学以外の機関に所属する者であった場合は、その所属機関を含む。）及び申立者に対し、調査結果を通知するとともに、その事案に係る関係機関に報告するものとする。

(認定の方法)

第21条の2 調査委員会は、申立者から説明を受けるとともに、調査によって得られた物的・科学的証拠、証言、調査対象者の自認等の諸証拠を総合的に判断して、不正行為等か否かの認定を行うものとする。

2 調査委員会は、調査対象者による自認を唯一の証拠として不正行為等を認定することはできない。

3 調査委員会は、調査対象者の説明及びその他の証拠によって、不正行為等であるとの疑いを覆すことができないときは、不正行為等と認定することができる。また、保存期間の範囲に属する研究データの不存在等、本来存在すべき基本的な要素が不足していることにより、調査対象者が不正行為等であるとの疑いを覆すに足る証拠を示せないときも同様とする。

(不服申立て)

第22条 調査対象者及び申立者は、前条第2項の調査結果の通知日から14日以内に最高管理責任者に不服申立てを行うことができるものとする。ただし、その期間内であっても、同一理由による不服申立てを繰り返すことはできない。

2 最高管理責任者は、前項の不服申立てがあった場合は、調査委員会に対して不服申立ての審査を指示するものとする。この場合において、不服申立ての趣旨が新たに専門性を要する判断が必要となるものである場合には、最高管理責任者は、委員の交代若しくは追加、又は調査委員会に代えて他の者に審査をさせることができるものとする。

3 前項の審査の指示があった場合、調査委員会（前項の調査委員会に代わる者を含む。以下、同条において同じ。）は、不服申立ての趣旨及び理由等を勘案し、その事案の再調査を行うか否かを速やかに決定するものとする。

4 調査委員会は、当該事案の再調査を行うまでもなく、不服申立てを却下すべきものと決定したときは、最高管理責任者に報告し、最高管理責任者は、不服申立てをした者に当該決定を通知するものとする。

5 調査委員会は、当該事案の再調査を行う決定を行った場合は、不服申立てをした者に対し、前条第2項の調査結果を覆すに足る資料の提出等、当該事案の速やかな解決に向けて、再調査に協力することを求めるものとする。なお、その協力が得られない場合には、再調査を行わず、審査を打ち切ることができるものとし、その場合には最高管理責任者に報告し、最高管理責任者は、不服申立てをした者に当該決定を通知するものとする。

6 最高管理責任者は、調査対象者から不服申立てがあった場合は申立者に、申立者から不服申立てがあった場合は調査対象者に通知するとともに、その事案に係る関係機関に報告するものとする。なお、不服申立ての却下及び再調査開始の決定をしたときも同様とする。

7 調査委員会は、再調査の開始から、研究における不正行為等にあつては50日以内、公的研究費の不正使用及び不適切使用にあつては30日以内に、前条第2項の調査結果を覆すか否かを決定し、その結果を最高管理責任者に報告するものとする。

8 最高管理責任者は、前項の報告に基づき、調査対象者（当該調査対象者が本学以外の機関に所属する者であった場合は、その所属機関を含む。）及び申立者に対し、調査結果を通知するとともに、その事案に係る関係機関に報告するものとする。

9 第20条第1項の悪意に基づく申立てと認定された申立者から不服申立てがあった場合、最高管理責任者は、申立者が所属する機関（当該申立者が本学に所属する者であった場合は除く。）及び被申立者に

通知するとともに、その事案に係る関係機関に報告するものとする。

- 10 最高管理責任者は、前項の不服申立てがあった場合は、調査委員会に対して再調査の実施を指示し、調査委員会は30日以内に再調査を行い、その結果を最高管理責任者に報告するものとする。
- 11 最高管理責任者は、前項の報告に基づき、申立者（当該申立者が本学以外の機関に所属する者であった場合は、その所属機関を含む。）及び被申立者に対し、調査結果を通知するとともに、その事案に係る関係機関に報告するものとする。
- 12 不服申立てをした者は、調査委員会の決定に対して、再度不服申立てをすることはできない。
（調査結果の報告）

第23条 調査委員会の委員長は、第20条及び第21条による調査結果の通知後、調査対象者及び申立者から不服申立てがなく、その内容が確定した場合、又は前条第2項による不服申立てに対する決定を行った場合は、最終報告書を作成し、関連資料を添えて速やかに最高管理責任者に提出するものとする。
（措置）

第24条 最高管理責任者は、前条による報告に基づき、その調査結果を調査対象者及び申立者、関連する部局等の長に通知するとともに、関係機関に対して、研究における不正行為等にあつては申立て等の受付から原則290日以内、研究費の不正使用及び不適切使用にあつては210日以内に、関係者の処分、不正行為等の発生要因、調査対象者が関わる他の事案の状況、再発防止策等必要事項をまとめ報告するものとする。なお、上記の期限までに調査が完了しない場合であっても、調査の中間報告を関係機関に提出するものとする。

- 2 最高管理責任者は、調査の過程であっても、不正行為等の事実が一部でも確認された場合には速やかに認定し、関係機関へ報告するものとする。
- 3 前2項のほか、関係機関の求めに応じ、調査の終了前であっても、調査の進捗状況の報告及び中間報告を提出するものとする。また、調査に支障がある等、正当な事由がある場合を除き、当該事案に係る資料の提出、閲覧又は現地調査の求めがあった場合は、これに応じるものとする。
- 4 最高管理責任者は、前3項による報告の結果、当該関係機関から公的研究費の返還命令を受けたときは、調査対象者に当該金額を返還させるものとする。
- 5 当該事案の内容について悪質性が高い場合は、必要に応じて法的措置を講じるものとする。
- 6 最高管理責任者は、前条による報告に基づき、不正行為等が認められなかったときは、必要に応じて申立者及び調査対象者への不利益発生を防止するための措置を講じるものとする。
- 7 最高管理責任者は、調査の過程において本規則で規定する関係機関への最終報告期限を延長する合理的理由があると判断する場合は、関係機関と協議し、最終報告期限の延長が認められた場合のみ、その認められた期間を延長することができるものとする。

（調査結果の公表）

第25条 最高管理責任者は、前条の規定による措置のほか、不正行為等があったと認められたときは、合理的な理由のため不開示とする必要があると認めた場合を除き、速やかに調査結果を公表するものとする。この場合において、公表する内容は、氏名を公表することを基本とするとともに、その他の情報についても特に不開示とする必要があると認められる場合を除き、公表するものとする。

- 2 最高管理責任者は、調査事案が学外に漏洩していた場合及び社会的影響の大きい重大な事案の場合については、必要に応じて当該調査の途中であっても中間報告として公表することができるものとする。
- 3 最高管理責任者は、不正行為等がなかったと認められたときは、原則として調査結果を公表しないも

のとする。ただし、調査事案が学外に漏洩していた場合及び論文等に故意によるものでない誤りがあつた場合は、調査結果を公表するものとする。また、悪意に基づく申立てであると認められたときも、調査結果を公表するものとする。

(調査委員会の事務)

第26条 調査委員会に関する事務は、研究協力課で処理する。

第5章 研究データの保存及び公開

(機関としての取組)

第27条 本学の構成員及び学生が発表した研究成果に対する第三者の検証可能性を担保するとともに、不正が指摘された際に対応できるよう、構成員に対して研究データを保存し、必要な場合に公開することを義務付けるものとする。

(保存する研究データ)

第28条 保存対象とする研究データは、構成員及び学生が外部に発表した研究成果に関するものとする。

- 2 構成員の研究成果に関する研究データとして保存するデータは、不正等を指摘された際に科学的根拠を持って不正が無いことを証明することができると考えられるものを構成員が自ら決めるものとする。
- 3 学生の研究成果に関する研究データとして保存するデータは、前項の観点に準じ、指導教員の責任のもと決めるものとする。
- 4 複数の研究者と共同で行った研究成果の研究データについては、第2項の観点に準じ、構成員が担当した部分について証明が可能な研究データを保存するものとする。

(研究データの保存期間)

第29条 前条で規定する研究データの保存期間は、研究成果の発表時点から原則5年とする。

- 2 研究分野の特性により、5年を超えた保存期間の設定が必要な場合は、研究成果の発表時点で構成員が自ら期間を定めることができるものとする。
- 3 保存する研究データの中に、法令等により保存期間が規定されるものがある場合には、当該データについてはその法令等の定める期間に合わせて保存期間を定めるものとする。ただし、法令等の保存期間が5年未満で期間満了後の即時破棄が明記されていない場合には、第1項の期間に準じて保存期間を定めるものとする。
- 4 共同研究及び外部から研究データを受領するにあたり、研究データの保存期間に関する契約若しくは定めが別途ある場合は、契約等で定められた期間に合わせて保存期間を定めるものとする。

(保存する研究データの管理方法)

第30条 構成員の研究データについては、個々の構成員単位で研究データ保管管理簿（以下「管理簿」（別記様式第2号）という。）に、研究成果を発表した都度、情報を追記して管理するものとする。

- 2 学生の研究データについては、指導教員の研究室単位で管理簿に、指導教員の責任のもと研究成果を発表した都度、情報を追記して管理するものとする。
- 3 保存期間を経過した研究データについては、適切に破棄するとともに管理簿の情報も適切に修正するものとする。
- 4 コンプライアンス推進責任者は、部局等における管理状況を定期的を確認し、適正に研究データが保存されていることを確認し、状況を統括管理責任者に報告するものとする。

(構成員の異動及び退職時の研究データの取扱)

第31条 構成員が他機関への異動若しくは定年退職等により本学を離れる場合（以下「学外への異動者」

という。)、学外への異動者が管理する研究データ(指導する学生の研究データも含む。以下同じ。)については、研究データ引継ぎ等証明書(以下「証明書」(別記様式第3号)という。)を作成の上、原則本学が継続して管理し、保存するものとする。

- 2 学外への異動者は他機関で研究を継続する等の理由で自らの研究データを持ち出したい場合は、管理簿及び証明書をもとに作成した持ち出しデータのリストにより統括管理責任者に申請し、承認を得て持ち出すことができるものとする。ただし、持ち出す研究データは複製を作成し、オリジナル又は複製を本学に残すこととし、複製が難しい研究データについてはその取扱についてコンプライアンス推進責任者と個別に協議し、決定するものとする。
- 3 コンプライアンス推進責任者は、学外への異動者の研究データをどのように引き継ぐか予め決めておくものとする。
- 4 学外への異動者が残し、本学が継続して管理し、保存する研究データについては、予め決められた保存期間の中で管理し、保存期間経過後は適切に破棄するものとする。なお、研究データは研究者個人のアイデア及びノウハウ等が含まれるものであることから、研究データの管理及び保存に係る業務又は不正行為等の調査以外に使用してはならない。
- 5 新たに採用され構成員となる者が他機関から持ち出した研究データで、成果の発表から第29条で規定する期間を経過していないものについては、管理簿を作成し、管理及び保存を行うものとする。

(研究データの公開)

第32条 構成員が発表した研究成果に対し、第三者より検証等の目的で研究成果及びその研究データ等に関して問い合わせがあった場合は、構成員の責任で誠実かつ適切に対応しなければならない。

第6章 モニタリング等

(監査)

第33条 公的研究費の適正な管理のため、国立大学法人室蘭工業大学内部監査規則(以下「内部監査規則」という。)に基づき、公正かつ的確な監査を実施するものとする。

- 2 監査室は、研究活動等リスク別対応計画の不正が発生しやすいリスクに着目し、監査計画を適切に立案し、実効性のあるモニタリング体制及び方法により監査を実施するものとする。

(監査室と監事等)

第34条 監査室は、内部監査規則に基づき、業務監査及び会計監査を実施するほか、監事及び不正防止委員会と連携して研究活動等の不正防止を推進するための体制について検証するものとする。

- 2 監査室は、監事と連携し、監事に適切な情報提供等を行う。
- 3 監事は、不正防止に関する内部統制の整備及び運用状況について本学全体の観点から確認し、意見を述べる。
- 4 監事は、特に、統括管理責任者又はコンプライアンス推進責任者が実施するモニタリング及び内部監査によって明らかになった不正発生要因が不正防止計画に反映されているか、また、不正防止計画が適切に実施されているかを確認し、意見を述べる。
- 5 監事は、前2項に示す役割を十分に果たすため、監査室、不正防止委員会及びその他の関連部署から、適切な情報提供等を受ける。
- 6 監事は、第3項及び第4項で確認した結果について、役員会等において定期的に報告し、意見を述べる。

第7章 その他

(その他)

第35条 この規則に定めるもののほか、この規則の実施に関し必要な事項は、学長が別に定める。

附 則

- 1 この規則は、平成27年3月4日から施行する。
- 2 第5章に規定する研究データの保存及び公開については、平成27年4月1日以降に発表された研究成果に適用する。
- 3 国立大学法人室蘭工業大学における研究活動上の不正行為に関する規則（平成19年度室工大規則第13号）は、廃止する。
- 4 国立大学法人室蘭工業大学における研究費の不正使用に関する規則（平成19年度室工大規則第14号）は、廃止する。

附 則（平成28年度室工大規則第28号）

この規則は、平成28年7月1日から施行する。

附 則（平成29年度室工大規則第29号）

この規則は、平成30年4月1日から施行する。

附 則（平成29年度室工大規則第51号）

この規則は、平成30年4月1日から施行する。

附 則（平成30年度室工大規則第31号）

この規則は、平成31年4月1日から施行する。

附 則（令和元年度室工大規則第23号）

この規則は、令和元年10月15日から施行する。

附 則（令和元年度室工大規則第47号）

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

附 則（令和元年度室工大規則第65号）

この規則は、令和2年4月1日から施行する。

附 則（令和2年度室工大規則第26号）

この規則は、令和3年4月1日から施行する。

附 則（令和3年度室工大規則第2号）

この規則は、令和3年7月1日から施行する。

附 則（令和3年度室工大規則第33号）

この規則は、令和4年4月1日から施行する。

別記様式第1号

（第8条、第9条関係）

別記様式第2号

（第30条、第31条関係）

別記様式第3号

（第31条関係）

年 月 日

誓 約 書

国立大学法人
室蘭工業大学長 殿

所属 _____

氏名 _____

私は、 年度の業務を遂行するにあたり、室蘭工業大学が指定する研究活動等の不正防止に関する教育を受講し、その内容を理解したことを約束します。

また、国立大学法人室蘭工業大学行動規範及び国立大学法人室蘭工業大学における研究活動等の不正防止に関する規則等の関係諸規則等を遵守し、研究活動等の不正行為及び不適切行為を行わない、させない、黙認しない、かつこれに加担しないことを約束します。

なお、関係諸規則等に違反して不正行為及び不適切行為を行った場合は、室蘭工業大学、公的研究費の配分機関の処分及び法的な責任を負い、その損害を賠償することを約束します。

研究データ引継ぎ等証明書

<申請者記入欄> 記入日 年 月 日

所属

氏名（自署）

下記のいずれかにチェックを入れ、必要なリストの添付、研究データの引継ぎ等を行ってください。

全ての研究データを室蘭工業大学に残していく。

→別記様式第2号「研究データ保管管理簿」をもとに、コンプライアンス推進責任者が指名する確認者に研究データの引き継ぎを行い、引き継ぎ完了の確認を受けてください。

一部又は全ての研究データの持ち出しを行う。

→別記様式第2号「研究データ保管管理簿」をもとに、学外に持ち出す研究データとそうでないものが分かるリストを作成し、コンプライアンス推進責任者が指名する確認者に研究データの引き継ぎを行い、引き継ぎ完了の確認を受けてください。

<確認者記入欄> 記入日 年 月 日

申請者の申請内容に基づき、研究データの現物確認、引継ぎ等を完了したことを証明いたします。

所属

氏名（自署）

<決裁欄> 最終決裁日 年 月 日

（最終判断者）

統括管理責任者	コンプライアンス 推進責任者